

ワークショップ1 報告

品田潤子・伊藤晶子 近藤彩（ワークショップアドバイザー）

ワークショップ1は「企業で起こっていることを教室へ 「ケース学習」と「ビジネスタスク」から学ぶビジネスコミュニケーション」というテーマで行いました。参加者は約70名で、日本とシンガポール及び東南アジアで活動している日本語教育関係者、企業関係者、日本語学習者をご参加くださいました。

1. ワorkshopの概要説明

グローバル化が本格化する中で求められる日本語教育・企業研修は、準備主義的なマニュアル型の教育・研修ではなく、企業活動で実際に経験するビジネスタスク、コンフリクトを教室に持ち込んで行うビジネス現場と直結した教育・研修であることを主張しました。そして、そのような教育・研修を具現するために近藤らが開発した教材の一つ『ビジネスコミュニケーションのためのケース学習』の概要を説明しました。

2. ワorkshop：Case01「まだ9時半です」

4人ずつのグループに分かれ、①個人作業（Case01「まだ9時半です」を読み、ワークシートに沿って自分の意見を考え、メモを作る、②グループ活動（グループ内で意見を共有し、話し合う）、③全体活動（各グループで出た意見を会場全体で共有し、話し合う）、④「ケース学習」の体験を内省し、気づいたことをメモする、の順でケース学習を体験しました。日本語教育関係者、企業関係者、日本語学習者が混在するようにグループを分け、違った立場から話し合いができるように配慮しました。

Case01「まだ9時半です」は、「インド人の社員が日本人の上司から終業直前に「明日までに」と仕事を命じられ、翌日の就業時間内にその仕事をするつもりだったが、日本人上司が翌朝の9時半に進捗状況を尋ね、パソコンの画面を覗き込んだことで生じたコンフリクト」です。

グループ活動では活発に意見交換がなされ、その内容が全体活動で紹介されました。日本人参加者からの「明日までと指示したら、翌朝までにできていることを期待する」に対して、「驚いた」という意見が国籍を問わずに出て、言葉にしてみなければ分からない隠れた前提があることを共有しました。その後、ケースに登場する人物に対するステレオタイプ（会社員は若い女性で、上司は中年男性）が自然と出ていたことへの気づき、驚き、反省が話題となり、日頃からコミュニケーションを密にしておくこと、確認を怠らないことなどが解決策として提案されました。

3. まとめ

参加者の皆さんに残して頂いた内省メモ（付箋103枚）を概観すると「自分とは違う受け取り方があることへの驚き」「コミュニケーションの大切さ・難しさ」「確認の大切さ」「ケース学習の類の研修の必要性」への言及が多くありました。